315

金刀比羅宮御大祭記

水野秋彦編

金令木舍

014024－000－3

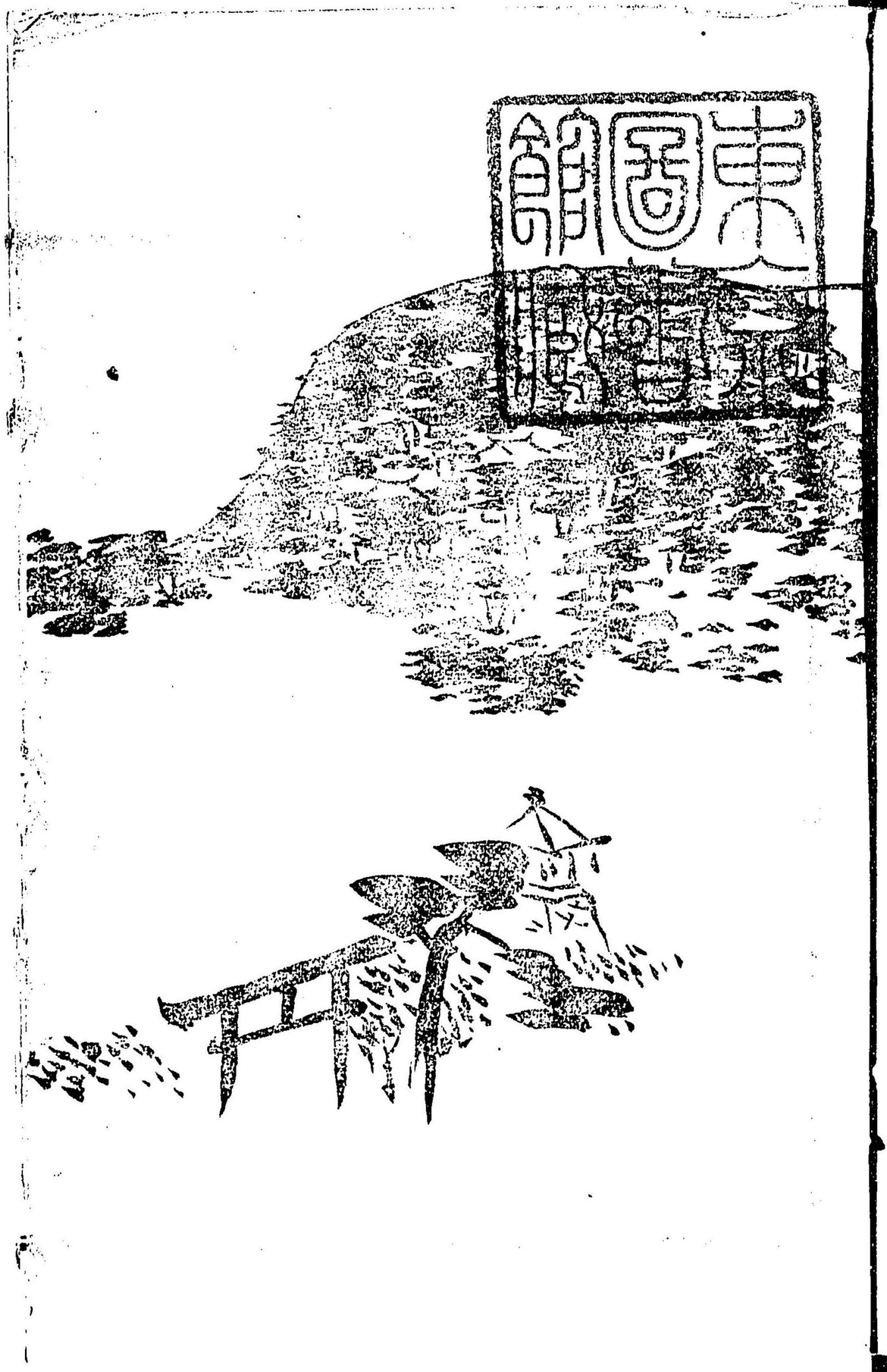
特67－315

金刀比羅宮御大祭記

水野　秋彦／編

M15

ABB－0277



金刀比羅宮御大祭記

此の卷を。或人をがり持來て。序をと乞へるゆ何ならむと披き見れば。吾　事比羅宮の。御大祭の概略を。明道館の教師。水野ぬしの筆記せしものになむ。さるは已さたに。齋場乃記ゐいふを。のゐ綴らそと思ひゐち。年毎の御大祭に。仕字まつりて。内　とゐに。まゐたり見もし聞をしつるにしも。如此はえをのせざるを。お の水野ぬしは。本年始をて御祭禮を拜み奉り。一わゐり見過しつるばかりゆ。ゐを精しく。祝舍齋場の事とり始て。本宮行宮の御裝飾。また

祭典神事乃御式。ゐるは行幸還幸の鹵簿まで。落る隈おを記されぬるは。學乃才の勝れたる故にはあるべきれど。尚かしこけれと　大神の免て給ひ幸給ふ御意のおはしけむより如此すみやかにと丶乃ひたるならむとは思ふ奉らゑ丶よ故其由いを丶ゐ卷の始にかいつけてゐへせるになん

明治十四年十二月廿六日

事比羅宮主典兼權少教正松岡　調

琴平宮御大祭記

水野秋彦謹錄

掛卷も以ともかしこき。玉藻よさ讃岐國の。玉乃小琴の琴平宮はしも。國作り給ひし。大國主大神の和魂をまさ丶ます。大物主大神乃櫛甕魂を。現御神と大八洲さ丶為し免さ丶後。此の國に渡り給ふし。崇德天皇の大御靈と。二柱の大神。並ひしつまりましく〳〵て。矣ゐはのふゆいや廣に。大みいついや高に。天乃下百八十國に。輝きおはしはせは。世の人〻の。尊ひ奉り敬ふ奉ること。限なく底ふも。なくて。一ッ心にゐが免敬ふ。崇敬講社の家數乃。幾百萬といふの矣ならす。四方の國人。たれもかも。其御恵をさひのみ奉れは。御社の御榮は。神風の伊勢國。拆鈴五十鈴

大祭前諸神事

乃大宮にも次がは給ひ。八雲立出雲國の。八百丹杵築大社にも並ひ給ふて。いとも尊く。いかも畏きを。なほなくおはしませる事。申すも更なる御事におはしはせば。某はた。大神の大き御惠に洩れぎして。衣手の常陸國より。遥〻に來ぬり侍マて。一とゝせの御祭のうちにも。重き限マの御大祭ぬ。拜み奉り見奉る事のうれしさ。言はそ方なくて。其御ありさまの。百ちか一つも書記し奉りて。此度の御祭ぬ祭りの為ぎむ世の人〻にも。のつぐ〻示してしがと。おぬけおそも思立ちぬるぞ。いとも。いとかしこう辱なきまさには有けるを。抑此御大祭と申せは。いと甚しき御祭にて。そきぐの御祭事ども何がしく

祝舍ぬ事

頭八頭司ぬ事

ぬがしかも。數ぬはぬおはしませば。其大概をかたたねば奉らむぬ。先づ八月三十一日の上祝舍の事始。九月一日の上祝舍乃大神事。同日乃下祝舍の事始。同二日の下祝舍の大神事。八日の潮川祓除。九日の上下齋場の御幣立。十日の上齋場小神事。同六日の上齋場の指合。七日の下齋場の同祭ぬど。殊に名たゝる御事ぬり。さてぬの上祝舍下祝舍ぬいふは。四條苗田五條榎井の村々の内ぬて。それに充たべき家數の定りぬりて。去年の指合せの祭に某村の某か家を上。何村の何か家ぬ下と。指ぬ定ぬて。今年の御祭に。專ら仕うまつるしぬる家をいふ。斯くて此の

齋場の事

祝舍に附きて。上の男女頭人。下の男女頭人といふを定そ。はは男を女も。大方十ゐ二つ三つ餘れる。若子を擇ふ事にて。祝舍の子の爲るべきなれと。餘所より入りて。それに立つ事も。常の例ゐて。さるをりは。必ず其祝舍の養子とおりて仕奉る例とそ。此乃頭人ゆ。齋主とを稱へ申へた物にて。重た中にも重きもの乃なり。それに頭司といふを副ふ。此は年たきたる人の爲りて。頭人を助きて仕奉るたかを也。齋場と申ては。其の祝舍の家地の内に。勝れて清げに宜しき處を擇り出て。梁一丈二尺。桁一丈五尺の廣さゐ。柱鳥居を。松の黑木もて立てゝ。屋を藁以て葺き。壁代も藁を用ゐ。戸ゑ杉の板戸にして。ゝが〳〵

八月廿一日
九月一日事始神事

九月一日二日大神事

ゝう建る屋を申ゝて。そて事始とは。俗に口明神事とも申して。齋場掛の社掌。神部等ゑ率て祝舍にものして。鹽水榊ゑ出さゆて。神部ゐ床を被はゆ。頭司には。厨を始め。家内を殘る隈なく被はゆて。床上ゐ新薦をゝき。案を置て假の神床を定め。禊乃詞を申し。榊を取りて家内の人々を被ひ。進酒式といふをも行ふをいひ。大神事とは。齋場の鎭地祭にて。其日祭場掛の禰宜。神部神丁を率て。先つ祝舍ゐて被して。齋場の地を撰ひ。忌竹をゐて。注連を張り。薦をゝき。案ゑ。神部に鹽水の行事をさせ。神饌を備へしめ。禰宜祝詞を白せは。社掌たちて。洗米醴酒切麻を四方ゐ打散ゝ。神部忌鍬を執て四隅の柱の穴を掘

九月八日潮川祓除

マ。頭人らも參り拜マ御祭をいひ。潮川祓除とは。石淵の神事場を祓ひ清メて。幄舍假屋ととをしつらひ。大門小門に。忌竹をゐて注連をはへ。敷石のうへゐ神坐と禊場ととを設けて。白ち幕をうち。四隅に忌竹を立て。薦をたき。夜に入りては。庭燎をかゝ。篝火をたきダゐなりて。宮司以下幄舍に就ちて。上下男女頭人頭司庄官らと共ゐ。上祝舍よマ出ゐ比饗を受ゞをゐて。宮司以下の神官。男女頭人等。皆川べマに出て禊祓行ひ。御琴をきき乃管掻と共に。神降の詞を白し。神饌を供ち祓詞祓のり。神官各ゐを取マて祓ゐち。大麻の行事をち。ゐをて撤饌昇神乃式祓へて。其大麻二本祓河中に投入ゐて。諸人に爭ひ取ち比

九月九日御幣立

ち祓ゐち。御幣立ゐは。當日乃比を ゐて。神部神丁齋場に ものして。大幣と注連とを調じ置ち。齋場掛の禰宜。社掌 を率て祝舍に參れは。彼注連どをを出すを。社掌祓ゐを 行ゐ鹽水ゐ清めて。頭司に仰せて。齋場の内をも清ゐさ せ。神部神棚の神離をおろし奉れは。禰宜手を拍ちて。御 神册と申すを入れ奉るを。又神棚にすゑ奉り。御饗の餅 つゐむために。祝舍の竈神祭も仕奉る。其式をへて。餅を 造りて神棚ゐ比ゝめ奉り。其御棚の後へに當てゝ。彼の 大麻を。三丈はかりの大竹の端よりやゝ下に。三つ結ひ つけ末にかむとりといふ物三つさして。高らゐに突立 て。さて神棚の傍へにて。男女頭人の祓して。招神乃詞を

九月十日十一日忌籠神事

十月一日小神事

白し。御膳を供へ。祝詞を白し。此祭をへて。齋場と祝舍とに忌札うちて。此日より來ん只乃十一日まて三十日の間は。頭人頭司朝毎に水にゆみて禊する事を始める御神事城いひ。忌籠とは。俗に泊始神事とも。いひて齋場掛の禰宜まゐ社掌神部等齋場に向て。その御祭とも。を仕奉て。此夜とり十月七日の夜はては社掌神部。上の齋場に一夜。下の齋場に一夜。已の家に一夜とて。ついでのまゝに。忌み籠りつゝ。定まれる御祭とを仕奉り初める御神事をいひ。上齋場小神事とは。昨夜とて忌籠れる社掌神部等。下の頭人頭司とも集へて被して御饌を供へ。祝詞を白して仕奉るをいふ。これは鎮地祭城大神事とも申すゐ

十月六日七日指合神事

そのをて。小神事とはいふなるへし。十月一日にもゐて。御祭も愈近にゆは。上下男女の頭人はとゝて。頭司飯取乃姥ゐ至るまて。此日より。一日に三度にゝ禊する例とぞ。此神事の矣は。下の齋場にては行はず。指合とは。宮司を始め齋場掛乃禰宜以下齋場ゐ參向ひて。頭人庄官等にあひて。頭司の請にまゐせて。先づ竈神の祭を行ひ。齋場の御祭仕奉りて。來年の上下の齋場城。おもほしめす御心のまにまに。定め給へ諭し給へと。請ひ白す神事をいふ。此式をへて。金刀比羅大神事指合帳といふを造る。又祭式の前後に。七膳片箸といふ饗ゐり。此は村々祝舍仕奉む事を競ひ欲する餘りに。何れと指し定めか

ねて。そ夜更をるまて語り合はをるに因りて。出來し故事ゐて。如此する上下指合祭にも。猶定まり果ぬをりは。十日までに必定ゑををる事も有りゑそ。上の御祭共に附きては。記さまほしき事の甚多らゑと。そは御社の祭事次第。又は御社ゐ年頃仕奉れる。松岡氏の自ら其事に預ををゝ聞もし見もしをるまゝに。書記せる。齋庭の記といふもの。に精しう載たれは。こゑさらひては書かぢ。ゐはれ。齋場なゑの形狀は。出雲國造か。天津神神壽詞奏ゑに。朝廷へ奉上る城りに。いづの眞屋に。荒草城いづの筵ゑ刈敷て。いづへ黑まし。天の瑞ゑに忌ゑもりけむ。古事にも准らへら徒。大嘗の悠基主基さへ思いて奉られて。いと風雅に。尊く畏こき神事にこそ。上の如く。種々の重き御神事を重ね重ねて。十月十日に神輿神事場の行宮にいでまし。十一日に還幸まします事。此年頃乃例なるを。今茲明治十四年は。他し所々に。傳染病のけの起りしに。さる城をは。人ゐまた一處ゐ集へむ事城。禁をる習はしのまゝに。愛媛縣廳ゑ。御祭事はしはしおくらかし奉徒ゑ捉てしゐは。此度まで後く徒來ぬる城。それを自らいとゝきをりゐ遇ひ給ふ御約束にやおはしけそ。陰暦の十月になりけれは。元ありつる御祭日にも當りて。古へゆかしく一きはめてたき御祭ゑそなりゐけるを。爰に十一月三十日は。昨日以ゐく降りしきりゑ雨も。昨

夜乃程ゐ清う止みて。旭の豐榮上りより。ぃゝちよを晴れ度りて。まこゑや生日乃足り日なと稱へけへく。宜き日おりゑゆは。萬つの御裝ゑをゝ。ぱゐ〳〵しう調のゑて。まつ本殿の御簾ゐは。いゑ甚じきやをかの曲玉ゆゐゑ。御階ゑ中殿とに。白布ゆ敷ゑ度たし。廣前に五百枝榊乃太玉串ゆ挿し立。拜殿乃三方に濃紫ゐ御ゑるし入れたる幕ゆ張りて。常乃御簾乃綠も見せて。處々ゆをゝり。御庭には。八咫鏡ゐゝやきゐる御翳二本。曲玉つゑゐる御鉾四をゆ。赤地の錦乃幅廣きに。金の御しるしをけゐる御旗に。紅白の綾のふきかゑし添へたるを。掲げたる大鉾四さをゝ。左り右りに分ち立。五色の絹ゆ。一色二條つゝ惣て十條取垂て。鏡掛けたゐ大榊ゆ左に同樣にて劔つけたるを右ゐ。御殿の軒過くるまて。高らかゐ突立て。賢木門にも其名ゑるゝ。五色の照ゐへゑでたる大榊を立。御垣の内より始ゑて。樓門ゐ至るまでの。道の両方には。高張造りの提灯を立つらねゐど。總ての御飾りとを。いゐめしく備へ奉りて。夕日の降ちといふ頃より。官司を始ゑ神官乃人々。悉く參り集ひて。御祭仕奉る。其御式は。神官たち先づ拜殿の南に居連ゐりて。祓乃おゑを約束ゐ起ちて。宮司禰宜主典は中殿に。社掌は拜殿に進ゑて。手うち拜みて。宮司玉串を捧奉りて。禰宜ととも左右の班につゑは。主典以下神饌を傳供し。宮司進て祝

詞はくはしく白ゝ竟れは。社掌あちて本の斑に列坐ゝ。さて巫九人いて丶舞仕奉る。櫻のかをしさして。雪のやうに白ゑ袖なる面をの。いをしゝ色ゝ清けなるが立並ひて。手つき足ふみあ丶獨のやうゑ調へて。舞ゝさひたゑをまこゝをうゑてあくて鈴の音扇乃風ゝ。そ丶ろ身ゑゝむこ丶ちゝるは。大神ゝ常世にもかをゝ。おほゝべをゝ見ゝ給る。舞をは終は。神官あち又手うち拜ゑて。各退出ぬ。撤饌乃保々は。月あ者さやかにさして。ずみをある物乃ゑゑ。嶺の松風さへ。さとひ丶ゝゝのひたゑゑてたさそ。いはをやゆなかをける。

十二月一日。卽ち大陰曆の十月十日の日に當をて。今日

出御前祭式

頭人叅向

そ御大祭のその日ゑる。此日は必す雨ぬる習をと。言傳へたゝるゝし正しくて。曉の程をを降を出てゝゝと。午時過る頃よを止ゑぬるそ嬉しき。さてけふの御本宮の式とゝ丶拜み奉るに。先つ御幸の事告け白す御祭おはしまゝ。其御ゐりさまは。大概常の御祭ゑ同樣にてそおはすへゝ。此御式は午後に行はゝけり。爰に社務所にては。表書院の虎の間といふに疊を敷並へて。祝舍のをまに設けゐし。七賢の間といふに屏風をゑて丶。齋場掛の坐とゝて。頭人等の叅う來るを待ゝに。四時といふ頃叅上りて。其黑門をり入り。中門を通りて。其廊の左に上の頭人頭司。右に下の頭人頭司とゝらゐり居て。馬乘とい

庄宮參向

頭人被除

頭人奉幣

ふその迄次〻に並居た。同時に四つの村〻の庄官も社務所に參れは。そ洗を富士の間といふに入れて禰宜社掌出會へは。來年の祝舍頭人の名簿を奉りて。赤飯に三種の肴そへ。ぬる御酒とも給はりて。被戸社に向ひ出づ。の〻る程に。表書院の坐定はりぬと。神丁とり申は。禰宜出て頭人等に對面たて。ち洗には赤飯に濁酒添へて出ゝを。給はりをへて。禰宜と〻もに被戸社に至りて被ひし。ち〻にても。板附餅なといふ式ありて。そて拜殿に參上りて。奉幣式仕奉る。其は上下男女の頭人。順序のま〻に坐に着き。頭司を始め。頭人の親屬まて。次〻にまゐぬせば。八間と廣けき。大殿の内にも。ち〻たり。さて社掌金幣といふを以て。頭人等の被ひし。又常の幣もて。集へる人を皆被ひて。頭人等に御酒御饌を給ふ。其式終れは。頭人巳下御前を罷出て。直ちに三保津姫社に參りて。又規式とも有り。そは齋場掛の禰宜。中央の座に着き。左右に上下男女頭人頭司と並み居て。此時七度の濁酒。七種の肴ゐといふ饗す。頭人の奉幣終れは。神官たち皆大前にぬ〻つき拜みて。宮司出御の祝詞を白し。禰宜御琴仕奉りて。先づ神輿を拜殿の中央にする奉り。宮司神前に向きてまをしたとして。神輿を中殿に入れ奉り。其御簾をおろして。宮司禰宜と〻もに。御靈代を移し奉る。御簾の内はい〻〻おはすらむ。掛卷もいとも可畏き

三保津社ニ頭人ヲ饗ス

出御前

御事にて。固より目に見奉るべきにはらぬ。耳に聽き奉るべきにそはらぬ中にも。御扉の響の幽かに。きゝわひゝきしそ。身にしみてそゞろ畏おかりける。移し奉りぬれは。いらましめの聲とともに。御簾を卷あげて。直ちに出立せ奉る。いや前ゐ太皷。次に御さき立の禰宜。次に御旗附乃大鉾ふゐさを。次に御唐櫃二は。次に御巫十人。次に御玉串。次にはた太皷。次ゐ伶人。次に御矛二本。次に御さし羽。次ゐ御楯。次に御弓。次に御矢。又御矢。次に御劍。おゝに御輿御蓋。次に宮司禰宜主典をつゞれて。御供仕奉る。此御行列は。殊にいみじき限をにて。其大鉾は昨日とり御庭に立ゐる。四そをのうちの二さをにて。坂路の程はおしゐつべをそはゐ。高さなゝば横ゐへゐり。御唐櫃は。一は赤地の錦の覆を。一つは緑の錦の覆ひしゐり。御玉串御鬚御鉾も。昨日より飾ゝるものゐゝど。今日は殊さらに穿つをゝう見奉られて。御そし羽ゐる鏡の光も。燈火に愈輝き鋒尖りゐる御鉾のをきばもはらはにきら〻きゐる。御稜威いとおそゐし。御楯は。御山の櫻木をもて造りしゐりゝて。面には御しるゝと其花とを。金にてゐがきゐる。に係をふかく見ゐて。左右に並ひ。御弓には靫を絃纛とをそへ。御矢は鷲の羽にて。四はの靫に入ゝて左右に二つゝ並べ。御劍は。錦の纛に包みて。おゝも左右に並べゐり。此神寶どもの中に鉾そし羽は。白

頭人採物

頭人先驅

丁ゐもちて。狩衣烏帽子の人〻これを護し。楯弓矢劔は。同装の人〻。うやうやしう捧奉りて。其前毎に高張の燈たてゐり。御輿の美しさは。筆に寫し奉るべきに非す。言の葉に申すべきにもあらねは。只金銀に造りたて〻朱に緑に塗り交じへ。玉垣鏤め鏡を掲て。目耀く御寶主の御物ども申さへき。それを白丁二十人はかりして。四方〻り御綱をりつ〻かき奉れり。斯て榊門を出給ふに。頭人はこゝまでは。何くれの採物を取りて。御後へに隨ひ奉りしを。旭社の前にて。其物どもを唐櫃に收めて。御先に直ほり立ち。櫻の馬場に下りて。殊に列を正して。上の頭人〻り次〻に進みて。女頭人は。樓門を出れは肩輿に

乘り。男頭人は。一坂降りはて〻馬に乘りて。御前立仕奉る。此頭人に副ひたる行列も甚いかめしく。嚴かにうるはしきを其は明日の處に記してむ。二坂をおりて神馬二つを。御唐櫃の次に引入れたり。白き御馬の。いゑじゑかさりたてたるにて。御鞍を始め。むながいしりがいふりはふみのやつくしさ。いはむ方なきに。行幸の大路を。上津石根に蹈堅め。下津岩根に蹈凝らしたるに。一つの御鞍の上には。八つの玉をすゑ。一にの御鞍乃しりゐは。金かゝやく大きなる玉一にて飾りゐるか。即て御靈代とも准らへ奉るべく見ゆれは。八〻手拍ち拜みつゝさるは大方の眼にはそ見ゆたまはね。御鞍の上にも。寄り

小坂渡御

内町渡御

下幸景況

おはすらむ御靈のかしこさをも。思奉れるなるべくて。
ほはれに尊し。たゝまして御前後の宮司禰宜主典等も馬
に上り。彼大鉾の御旗も。み空に高く立て靡かし。愈增御
たらを調のへて。坂路狹きとねり給ひつゝ度り給ふ。小
坂坂過きて。內町に出給へば。道ゐを平らゐみて廣ゐ
ば。拜み奉る人〻は。たゝいゝをせゑ。家〻の軒端ゐ矣ち溢
ゐゑ。已れは御出立をはじゑ。榊門出て給ふ御けしたも
樓門出給ふをゑ。御先に馳せ。御跡坂追ひたゝ拜み奉り。
しに。百千の燈ゐゝやかし。物の音どゑ響かして。雨のお
ごりの薄雲たゐ引ゑ深山路坂。神降ゑに降り給ふ御な
りさまは。天の八重雲坂。伊豆乃千別に千別て。皇御孫命

頭人行宮所ニ先着

神輿着御

着御祭式

の天降ましけゑ。高千穗の俤も。目前ゐ浮びて。尊しゐど
申ゑゑも。愚なる事なゑけゑ。斯て鞘橋坂渡り給ふ程は。
頭人はゝやゑ御行宮乃處にたきて。掲示標の前にて。乘
物よりおゑて。上下頭人頭司庄官なゑは。皆門內に入り。
其供人どもは門外乃幄舍に入れ。御先乃禰宜は。拜所ゐ
さふらひて。着御を待奉れば。鼓笛乃ゐ漸〻に近づきて。
大御輿まもなゑ。神事場の御假宮に着かせ給ふ。卽ち御
輿ゑ。御假廬の石壇にたゐ奉り。宮司以下乃神官。大前を
拜み奉りて。各〻假屋の處〻に憩ふ。さる程に。神部等の
弱肩に。太襁とりゐけて。八束穗のゐゐし穗もて。豐ほぎ
ほぎくるほし。歌つゝ舞つゝ釀けむ。豐御酒は。甕のへ高

たり甕乃腹みてならべ。鰭乃廣物鰭の狹物は。割竹乃ゑを丶くにつらねて。潟津藻邊津藻も。皆悉く取り供へて。天の眞名咋の豐御膳と。大御膳と丶のゑ出でつゝは。宮司以下大前に進ゑて。八平手うちおし。額ぬき拜ゑて。主典以下。其大御膳を手ごしゐしつ丶八取の机に奉り終れは。宮司太祝詞事白し。次ゐ頭人頭司等も。假屋とりゐち進ゑて。御前を拜ゑ奉り。さて倭舞仕奉る。ゐは徒にゑでたく。まひぬさひて入りぬれは。宮司以下皆大前を例のやうに拜ゑて。そて御膳を撤し奉りき。曇れりし空も。御輿着かせ給ひし程とり。漸くにゐるくなりもて來て。舞仕うまつる頃は。雲間の月も。松の梢ゐ影すみて。

白う燒きあげたる。四つの篝火五ゑおろの庭火に。光り添へたる。大空も心ゐりげに見にて。尊さ言ん方なく。しかゐ乃ゑならぢ。御假屋所乃内にを外にも。百千の燈火どもをゐてつゞけて。さなから晝のやうなるに。川水隔てし向ひの園乃。巖の上へ木の本の。をちこちにさへ。火をともしたるは。そこには紅葉の多かれば。山祇の奉るみつきを。夜の錦ゑ坊ぎらそ乃心しらびと見えて。ゐと風流ゐあはれ深かりけ。ゐ丶る尊をを拜み奉らむとて。群れ參づる人は。ゐと數多にて。其數ゐとは。大方にも知るへくもあらす。さ夜ふくるまて。ひし免きあゐしは。ゐと甚ういみしゐりき。

二日。ぬの空も。昨日の空ゆゑて。のはたゆより打しぐゆたりたゝを。例乃晝ごろよりはぬらぢなりぬ。爰に御行宮所。卽ち神事場と申ては。御本宮より十五六丁隔たりて。阿波町といふ町の端に。廣々平らかなる地城し給て。石淵といふ淵にそひゐる方ゆ。殊に一所を齋場と定給て。石の玉垣木の齋垣を立て給ぐらし。大門脇門を搆へて。其内ゆは常は人をも入れぢ。嚴ゆにいとすがすがしう。清げに齋を置れ。其側に休憩所といふを造り。藏をも建置て。御垣の内ゆ。十本餘りの。松の大木立榮に。一方は梅桃の花園にしたてたる處にて。川水の流れは淵の名に負ふ石ともにたぎちて。さゝとおゝづれわたり。あな

たの岸の岩根木立のたゞにまひ。心を入れてゆぎとつくろひたる。庭坪の樣して。ちしほの紅葉の。遲ゆりしが今を盛りとにほひたるは。所ゝにかくれゆゐの。御几帳など立て度しゆらむやゞゆゐるに。其玉垣の内の石壇に。松の黑木の柱を掘立。板屋を葺て。其上へを檜の青葉もて葺重ゆて。御簾を垂れて。忌竹たて注連引そへて。御行宮と仕奉り。其前の石壇の四方ゆ。丸木の柱板乃屋に。二丈ゆ一丈ばかりの假屋を建て。これにも忌竹注連など。例の如くして。紫の幕張めぐらし。荒薦ゝきて拜み所ゆし。御假宮の後へには。五色に縫たる御帷を引ゆたし。其左の方に。御厩二た間をたて。南面には。御饌殿樂殿ご

処に。縦六丈横一丈二尺なる假屋を。神官乃休憩所とた
て。北には。縦三丈六尺。横一丈二尺の假屋を。頭人頭司巳
下の人〻の休憩所を建てゝ。彼乃御旗鉾。御翳。御鉾を御
廷に立て輝かし。拜所の左右に案を置て。御劔御弓矢御
楯をつらねて。かうぐしう飾り奉れる中にも。いかし
足穂の瑞穂とは。かゝるをこそと見ゆる懸稻を。左右
りに奉れるなどは。ゆかしう処でたくて。万千秋の長秋
に。かゝる御祭うゝ給はゞ御しるしにこそと。いと尊く
かしこき。さて朝の御膳は。例の如く奉りて後。午時ゝり
前に御祭ありて。倭舞仕奉る。ゝふは庭火の保かゝけに見
しには似ぬ乃づあらはにて。裝束のいかあも。舞童のま

ゝかたちを。隈なく見ゆるたるに。手の蹟足の蹟など聊
もはじらぬ。こゝちようふるまひたるさま。こよなう処
でたく。物の音どもに。此頃の雨にたぎちまをれる。岩波
の花とそへたるにぞ。一しほきこゆ増りける。かくて午
時過て。又御祭仕奉る。御前の式とも。常の如くにて。祝詞
白し竟れは。巫舞仕ゝまつる。例の清らかに花やかなる
裝ひども処でたくて。舞ひる乙女の。何おらん持棒げて。
赤裳ひそびきつゝ。のどくしう出來るなど。其方にう
とき筆には。書つらぬべくもあらぬ。其御饌おろし奉る
をりしも。大麻神社など記せる旗ども立て。獅子舞五む
れ參來て。御庭に並びて。益荒男の。知れる限りの手を盡

階子登

して。舞すさびたるありさま。某の國の奥山にゐけ入りて。まゝ目に見たらむこゝちする迄。ゑざましく。其皷打ちも。皆手だれのものにて。獅子とゝもに狂ひつゝ。抱ふりなから。舞ひみ躍りみ。とゞゐ〳〵と。打なしたるが。御饌おゐしの樂の音を。打消ゐげなるも。なかなかをゐしゐりけり。又塚の外にては。火消どもの。階子乘りといふわざしけるゐ。勝くれて巧なるが。過ちてまさかさまに落てけれは。皆人あなやと。胸つぶれて覺ゑしを。何のけもなく。又馳り登りて。樣々の危げなるわざしつるを。それも大神の御守にたそと。人々の感じさわげるも。一つの興なりけり。獅子舞もまだ舞果ぬにはや夕暮近くな

還幸祭式

還幸發御

頭人行列

りぬれは。禰宜巳下。又夕御膳を供へ奉り。巫舞仕奉る。斯て燈火よ庭燎よと。もてをわく程ゐ。日も暮れ果て大御輿たゝせ給ふべき時至れは。宮司大前に進みて。還幸せさせ奉るよしを白し。主典巳下の神官。ついでのまゝに傳ゑつゝ。御饌をおろし奉り。更に手うちて拜みをへて。御先の行列を。次ゝに發し給ふ。頭人たちの行列は。昨夜の所に記し洩はは。大概おゝに記そんに最先に馬乘といふが立て。次に高張のまたゐて。下女頭人。次にそれに隨ふ人ともの群は一と群れ。次に引馬。次に鐙。次に合羽籠のたくひ一列。次にゑらはの杖突一群。次にはさみ箱。次に鳥毛のたて物一列。次に薙刀。次に上下着た

る一群。次に媼と女の一群。次に上女頭人。次ゐそれに隨ふ人〻の群。一群。次に引馬。次に合羽籠の類一列。次に高張一列。次に下の男頭人。次にそれゐ隨ふ人〻一群れ次に鋏箱の類一列。次に鳥毛一列。次に上の男頭人。次にそれに附ける人〻一群。次に鑓立傘の類一列。次に上下着ゐる一群を立つゝけて。斯て女頭人はうつくしく裝ひゐてゝ。肩輿にのり。其四方をり。つり提灯を二三十はゐり棒ぎたれは。綾錦の飾り。いとまはゆく男頭人は。衣冠清らゐに出たちて。おれも例の提灯棒けて。前後左右をり照らしたれば。馬の具の金銀の光も。きら〳〵しくぞかゝやきける。鳥の毛たて物どもは。半被といふを

着て。をゐしげなる前垂れ掛たる。をのおどもの。ゐけ聲たてゝ。おゐゐゐたと投うつして。過つ事もなく取ゐはしつゝ。おもしろうねりすさひたるも。見處おからぢ。杖つきの童の。大地も突きぬべうたけびゐるも。いさましけおりけり。惣てかさまは。昔の國持大名おどいふが。晴れの出でゐちに物しけむに。いとよく似ゐらんを。其は今は見ん事難き世となりぬゐに。此御祭につきて。ありし世の風儀も。殘し傳へゐるも。おたゐしや。此頭人にかゝれる。物の數人乃數の。おひゐゝしう多き事。上に粗記せる如くなれは。いと長〻しう引續ぎて。惣ての御行列。三にしたる二つは。頭人の列おりけり。おれにつ

消防人供奉

渡御形狀

けても。古を世より。頭人といふものを。おろそかなく尊く重を物にたけん事たるけれは。人〻の涙落すまで。めで仰きて。手うち拜みおどすふも。そる事なりかし。そて今宵の御列には。下の頭人を先にたてたるを。昨夜の御列には。上の方を前にたてけり。これも古〻より定れる例とそ。さて上の行列の次〻は。皆昨夜の如くにて。正しう嚴おに。尊々畏こういてましたる。其御後へに。火消しどもの。纏ひたるしふりたて。階子棒けて追ひ隨ひ奉る樣も。今樣ながらいをましげなり。一の坂〻りは。道嶮しかれば。御尾前の頭人神官。皆馬〻りおりて攀登るに。御列と〻のふる。皷のおを物の音こそはずをまじりすみをぬり

て。左右の谷底にも響きぬれ。百千に餘れる御供奉人。いろみじうたまりたゝしみて。靜〻と大宮近く。登り給ふ御形狀は。皇大神の御子事代主神と共に。皇孫尊に。天下避り奉り給ひし。御心を表はし申しゐ。八十萬の神を。天高市に集へ給ひて。そを率まして。天ゐ上り給ひし。神代の御けしきも。如此おそおはしけめと見奉らるゝに。御山の上へには。高皇產靈神の御女。三保津姬命の。宮柱高たりおはして。還りいでます戎待きおえおはたまませば。高天原にて有りをる御事さへ。たのひ奉らるをるにても。彼の頭人と申すは。高皇產靈神の大詔もちて。皇大神を祭らせ給ひし時に。經津主神のならせ給ひし。齋主の御

着御

還幸御祭式

頭人奉幣

三保津姫社諸式

跡に准へ奉りし物とこそ思はるれ。かゝる程に御さきぐのむれ〳〵。御山の處〳〵に分れ留まりて。大御輿大宮に着かせ給へば。たゞちに中殿ゑ進め奉り。宮司巳下御前を拜みて。宮司禰宜中殿ゑ入まして。其御簾おろして。大靈代を本殿に還し奉る事。出御の御をりの如くなり。さて神官皆集ひて。還幸の御祝の御祭仕奉る。宮司祝詞を白し。神づかをだち。皆拜み終れば頭人等。おくひは下城上に。拜殿に參伏して。奉幣の式仕奉り。おゆしの御膳ども昨夜の如く給はりて。三保津姫社ゑまきて罷出ぬれば。神官たち例の如くして。御膳城おゆし奉りて。宮司巳下皆罷出。三保津姫の社にては。昨夜の如く規式なりて

社務所諸式

御幣注連下神事

月前懷口

後。禰宜ゐでゝ。頭人たち庄官等を列ねて。齋舍の齋詞といふもの城讀み聞かせ。今年の御祭。如此く恙ふく仕うまつりをへつる。祝言なと言ひて。諸とともに社務所の表書院に降り頭人を虎の間。庄官を富士の間にすゑてずべて昨夜乃如き式どを城行ひ終れは。頭人巳下皆罷出ぬ。本殿乃御祭乃果ぬるは。はや十一時といふ頃なりしを。猶齋場掛乃神官等は。ゐゆみ怠るけしきもなく。上下齋場に參りて。御幣注連下の神事といふを。式乃如く行ひけり。此夜。宵乃程は曇りたりけるを。着御乃頃くりは。餘波なく晴わたりて。月影乃清う澄ゐるに。さ夜更けては。人のさゞきも漸く靜まり行くまゝに。物のゐはれも

立添ひて。彼の命あれば。の御歌なども。思出奉らるゝぞ悲しき。そは。ど天皇の現し御身こそ。常からぬ浮世のを。がを。のやが軒端の月らげも見給ひけれ。大靈は。神とも神とまし〳〵て。かを世に類なを。金銀輝き度る大宮に。千代万代に齋られおはし坐て。此度の如は。准へなく尊きいらき御祭を。年ごとに享給ふを思奉れば。ほゐにはおはさで。此國へ渡らせ給をし御事も。却りて甚じき御幸の御基に。をはしましゝふるべを。て。奇しを尊き御契にぞ。昨日今日の行幸にも。大御心の愈はを〳〵おくさ美給ひて。其あ美の御怨ぶどは。なごりなを。おぼを。けち。忘れ果てさせ給ひて。中今の天皇の大御代も。天下のおほみたからをも。愈ます〳〵守り幸へ給はんかし。

穴かしこやゝ。なかしこ。

三日。御祭は。昨日にて全く事終へぬれは。社務所の書院に。幾百と數多の人〻を集へて。大直會の宴を。おのれも此御山に在るかひうれしく。其人數みて。豐御酒たうべつゝ。人〻の物語を聞けば。今日も明日も。猶御祭に附きたる御式は。これかれありけり。そを聊また記添へてむ。

今日の夙て。上下頭人頭司等は。來年の頭人頭司と共み御山み詣てゝ。來る十四日の。三日參の神事のたを。散齋を始む。十四日は。今年と來年の。頭人頭司庄官親族等上り來て。社務所に至りて。齋場掛の禰宜み從ひて。祓戸社

頭人參向

十四日三日參神事

に被ゐし。本宮ゐ參上りて。來年の頭人を上に。拜殿に參侍りて。神丁祝舍よりの獻り物を捧ぐれば。社掌受て御前に奉り。次に來年の上ノ頭人奉幣し。おろしの御酒給はりて。社務所に返りて。規式の饗あをて。罷りいづ。十五日は。社掌神部等。上下齋場に向をて。祓して。齋場燒却神事をいふを行ゐ。齋場をこ係ちて。木竹ども殘る事なく琴平村の下の河原に持運ばゐて。燒拂はしむとぞ。されらの外に記さまほしき事どをは。いと數多なれと。餘りに長くしうくだ〳〵しらむは。試みに讀み見ん人の。厭ひ捨つべき種なりと。先筆殺さゝ置くは。明治十四年といふ歳の。十二月十日にゐむ

明治十五年九月十八日御届
同　年同月三十日出版

定價拾貳錢

編輯人　茨城縣士族　水野秋彦　常陸國笠間桂町二百五十四番地

出版人　愛媛縣士族　鈴木幾枝　讃岐國香川郡高松二番丁卅九番地之内壹番屋敷

印刷　高松鈴木活版所

○正誤

十丁裏　狩ハ淨ノ誤
十九丁表　頭書ノ口ハ舊ノ誤